

歩足には

棒当たる

文 夜の機動戦士  
絵 左側

DOJIN  
全年齢  
全年齢対象  
どなたでも  
購入・閲覧できます

意外と……

磨いてみたら、割と  
いい線いったんじゃ  
ないですか……？



# 歩く足には棒当たる

夜の機動戦士

夜の書斎



真に臆病な者は愛を表明できない。  
愛を表明するとは勇敢さの表れである。

「歩く足には棒当たる」――。

動いて努力していれば、善い事にも悪い事にも出会うが、黙って家の中に引込んでいたのでは、無事な代わりに何の生き甲斐も生まれてこない、という意味のとわざです。

別の辞典では、「どんなことでも物事を行えば、わずらわしいことが起き、面倒な関わりを持たなければならなくなる」ともあります。類義語としては「犬も歩けば棒に当たる」があり、こちらの方がずっと広く知られています――。

ことわざや慣用句は、遙か昔から伝承されてきた訓戒や風刺。世代を超えて普遍的に通じる名句であるからこそ、今のキヴオトスにも根付いているのです。

「歩く足には棒当たる」は、行動を起こせば幸運に巡り合えるかもしれない、と捉えることもできますが、行動を起こしたばかりに不幸に遭ってしまう、と捉えることもできてしまいます。だから、遺されてきた言葉を受け止めてどのように自らの訓戒とするかは、私達自身の心の持ちよう次第なのかもしれません。

結果を求めるならば行動を起こせという教訓。私はそう受け止めました。

## 5 歩く足には棒当たる

「……ふう、有意義な時間が過ぎせました」

朝のモノレールが、速度を落としていきます。通学中のひと時は、学習と思索にふけていっているとあつという間です。図書館から借りてきた「ことわざ由来事典」を、私は鞆にしまいました。

自然科学の本を好むのは、ミレニウム生としてある種の必然。ですが、私達が普段用いる「言葉」についてもっと知見を深めたいと願うのも、言葉で学問する私達にまた必然と言えましょう。

現代にも残る言い回しの多くは、百鬼夜行やトリニティ、あるいは山海経といった歴史ある土地にその源流があるとされています。いずれはそれらの地区の図書館も訪れなければなりませんね。

改札を抜けて校舎に向かう途中、ウタハ先輩からモモトークが届きました。「新発明」が形になったそうです。新発明。何とロマンにあふれる響きでしょうか。

今日はもう、授業が終わったら大急ぎで部室棟に直行です。とはいえ、お外はすつかり夏模様。あくまでも、程よい早歩きで向かうことにしました。

エンジニア部の部室に行くと、ウタハ先輩が優しい笑顔で出迎えてくれました。マグカップからは、煎れたてのエスプレッソのほろ苦い香りが漂ってきます。

工学書の積み重なったテーブルに腰かけると、先輩は作業着のジャケットを脱いで、椅子の背もたれに引っかけました。紫色の小さなケースが差し出されます。

「おおっ……私の眼鏡と同じデザインですね」

「試作品だからね。コトリにつけてもらってデータを取るからと思って、トレードマークもつけたよ」

「ありがとうございます！ では早速……」

ケースを開くと、マットな銀縁のフレームに、傷一つないツルツルした美しい曲面のレンズ。私が着けているものと同じ、片側だけ涙滴を模した出っ張りが施されています。早速着けかえてみると、視界が途端にぼやけました。

「あ、左の弦で、レンズの度は調整できるよ」

右の方から、ヒビキが割って入ってきました。言われた通りに弦を撫でてみると、みるみる内に視界がクリアになっていきます。

「なるほど。度の調整がこんなに簡単になるとは、ユニバーサルですね！」

## 7 歩く足には棒当たる

「おつ、カメラがオンになった。ほら、コトリの視界がこっちに映ってるよ」

設計通り、カメラの中心は、レンズの中心に固定されているわけではなく、着用の視線に追従します。私がヒビキの犬耳がはためくところを注視すれば、それがモニターの中心に映し出されます（私はそれを確認できませんが）。

瞳孔の収縮に対応して映像のピントも変わります。まさに、人の目をそのままカメラにする眼鏡です。

「ところでウタハ先輩。自爆装置を内蔵したりは——してませんよね？」

「やっぱり入れた方が良かったかい？ 悪用すれば人様のプライバシーを覗き見放題だし、リバースエンジニアリングを防ぐためにも、正式版には組み込もうか」

「ひえっ……！！ め、目元で爆発が起こるのは、さすがに着用者の身に危険が及ぶと思いますっ！」

エンジニア部の発明品は、主にウタハ先輩の強いロマン志向で、大半に自爆装置が搭載されています。私もヒビキも入部当初は戸惑っていたのですが、いやはや、人の慣れというのは恐ろしいものです。とはいえ、エンジニア部のそんな日常がアイウェアにまで及んではいなかったことに、私は胸を撫でおろしました。

「カメラの映像はこのモニターに出力されるようにしてあるから、後は……オンにしたまま持ち運んだ時の、バッテリーの持ち具合を見ておきたいね。これ、ワイヤレス充電のクレードル」

ヒビキが周辺機器を渡してきました。埃が付着しないコーティングがレンズには施されていますが、一応、眼鏡拭きも。

ふと、壁の時計が午後三時を告げました。

午後三時。

午後三時——

「わわわっ！ 今日担当の日なんです！ すみません、ししっ失礼します！」

ミレニアム自治区からシャーレのあるD・U・までは、乗り換えが最低一回は必要になるのです。私は大慌てで部室を飛び出しました。

## 9 歩く足には棒当たる

幸い、モノレールから地下鉄への接続がうまく行って、シャールレ地下鉄駅には十五分遅れで到着できました。スクールバッグを肩に担ぎ、愛用のミニガンはキャスターに乗せ、旅行者がキャリーケースを引き摺るみたいに走って、冷房の効いたビルに飛び込みます。

大ききの割に人の少ないシャールレのビルは、大抵エレベーターはガラガラ。運搬されている間は急ぎようもありません。ああ、エンジェル<sup>24</sup>でエナジードリンクでも買っておけばよかった、と思つた頃には、もう地上一階は遥か彼方です。

「先生、すみませんっ！ 豊見コトリ、遅れましたっ！」

我ながらよく通る声を張ると、自分のデスクで猫背になっていた先生が、のっそりと顔を上げました。そして、微笑が出迎えてくれます。

「お疲れ様、コトリ。今日も元気がいいね」

中指をブリッジにトントン当てて、先生はズレてくる眼鏡を直していました。

「あれ、先生、なんだか眠そうですね」

「うん……ちよっと居眠りしちゃってた。いい目覚ましがかかってよかったよ」

寝てたのは、他の子に内緒だよ。

照れ笑い混じりにそう言うと、先生は両手を突き上げて伸びをして、レーザープリンターに溜まった書類を取りに行きました。

「先生、何かお手伝いできることはありませんか？」

「ちよつと、サーキュレーターの調子が悪くてね……業者さんを呼ぼうと思ったんだけど、見てもらえたりするかな？」

「ハードウェアのことならお任せ下さい——けほっ……」

ドンと胸を叩きましたが、少々力み過ぎたようでした。むせた所をクスツと笑われて、顔が熱くなります。私はそそくさと、部屋の隅へ置かれたサーキュレーターへ向かいました。

「うーん……」

ソケットに繋いで動かしてみると、バリツと硬い音がして、羽が異音を立てました。カタカタ、キュルキュル。不穏な音です。エンジン部が持ち込んだ予備の工具箱を出し、新聞紙を敷いてサーキュレーターをバラしたら、ホツと一安心。それほど複雑な事態ではありません。

「先生、不調の原因が分かりましたよ！」

「そうなんだ。どうなつてたのか、説明してもらつてもいい？」

——きたつ……！

私の生きがいを、先生が引き出してくれました。

「では、説明しましょう！ まず、サーキュレーターの羽が動かなくなつた原因ですが、主にホコリ！ 羽だけでなく、モーターの本体や内部の見えない所に意外と溜まりやすいんです」

「ああ、確かに、掃除してなかつたからね」

「それにこのサーキュレーター、電源コードが本体に巻き付く形にクセがついています。グルグル巻きはいけませんよ！」

「そうなんだ。どうして？」

「電源コードを本体に巻き付けることで、電源コードと本体の付け根に大きな応力が加わるんです。応力が繰り返し加わることで、内部の銅線が断線してしまいます。何度も折り曲げた金属が疲労で折れてしまうのと同じ原理ですね」

「ふむふむ……」

——あつ、目が合いました……！

先生は、自分のお仕事をしながら、時々こちらに視線を送ってくれます。まるで、話の続きを促してくれるように。先生の相槌のおかげで、私は安心して説明を続けられます。

「内部で銅線が断線すると、電気が流れにくくなり、発熱することで周囲の被覆樹脂が溶けてしまいます。電路が接触不良を起こした時に、銅線同士で短絡すると、スパークを起こし、溶けた樹脂の部分から発火してしまうんです」

「……なるほど、それは怖いね……」  
ちらっ。

——やった。また……！

先生は、視線を感じ取るセンサーを体のどこかに装着しているのでしょうか。もしかして、ウタハ先輩かヒビキか、はたまたヴェリタスのハレ先輩が、私の知らない間にそういう新発明を作ったのでしょうか。

「……ということ、コードはゆったり円形に束ねるのが吉です。使っていない時はソケットから抜いておくのも大事ですよ。ご安全に！」  
「うん、よく分かったよ。ありがとう、コトリ」

「えへへ、お安い御用ですっ」

先生は最後まで私の長話を聞き届け、お礼まで言ってくれました。ささやかで、幸せなひと時です。通気のためにあちこち開けている制服の内側が、ぼっぼと火照ってきます。

軸に油を差し終えた所で、サーキュレーターを元の位置に戻しました。息を吹き返したそれは、景気よく風を吐き出して、部屋の空気を循環させ始めます。

「先生、お隣いいですか？ 一仕事終えた所で、課題を進めておきたくて」  
先生と生徒は隣同士ではなくて、正面同士で向き合うもの。  
本当は、向かいのデスクだつて空いているんです。

それでも私が、先生の隣に座りたいと思うのはなぜか——  
隣に座りたいと思うのはなぜか……

——それは……

俯いた拍子にずり落ちる先生の眼鏡に、心臓が、ドキン——  
「え、えっと、先生！ ちょっとお手洗いに行ってきますす！」

上がっていく心拍数を悟られたくなくて、私はバタバタとその場を離れました。

「……はあ……」

トイレの個室。それは究極のプライベート空間。閉じこもるのが目的ですから、便座の蓋は閉じておきます。何度か深呼吸していると、何とか動悸は落ち着いてきました。

目を閉じると、先生の横顔が脳裏に浮かびます。

出会った当初の頬。私が親近感を覚えたあのふくらした頬は、激務の影響ですっかり痩せています。眼鏡がすぐズリ落ちてしまうのはそのせいです。

俯く度にちらりちらりと見える裸眼の目。睫毛が長くて、二重の目蓋がくつきりしています。重い疲れから淀んだ目をしていることが非常に多い先生ですが、たまに、シャキッと虹彩が輝いている時があります。あの輝きが見たくて、私は先生の目を覗かずにいられません。

シャツの襟もかなり緩くなってしまったみたいです。細くなった首や、ノーネクタイの時にちらりと見える鎖骨を見ると、たまたまなくドキドキしてしまいます。

血管がうつすら浮き出た腕が艶めかしくて、シャツの袖を捲っている時は何秒かに一回見てしまうほど。大人の色気、というヤツでしようか……！

でも、何より私の心にさざ波を立てるのは、私の説明を聞き届けようとしてくれる優しさ、言葉のキャッチボールが的確で聞き上手な所、困った時は必ず何とかしてくれる頼もしさ――

――ああっ……先生っ、もう堪らないですっ！

放っておいたら口から溢れ出そうになる熱を、私はスマートフォンにメモ帳に打ち込んでやり過ぎします。冷静な気持ちで見直すと黙って削除することも珍しくない、オーバーヒートした叫びをスクリーンに吐き出さないと、ただでさえ知識を詰め込んで窮屈な頭が、それこそパーンと破裂してしまいそうなのです。

私の一五センチの体は、先生の前では本当にちっぽけです。並んで立つと、いつも先生の顔を見上げるばかり。頑張って存在感を発揮していないと、たちまち先

生の視界から外れてしまうかもしれません。

先生にとつて私は、数ある生徒の一人。私の長話を聞き届けてくれるのも、子ども話を聞いてあげる大人だからなんです。きっとそうです。そうに違いありませんとも。

私は、先生とちよつと一緒にいられば、それで満足できなきやダメなんです。

それが分かっているのに――

もつと近くに行きたい。

もつと深く知りたい。

叶うならば、手を伸ばして触れたい。

あの大きな掌に、手や頬を、包まれてみたい。

でも、そうする勇気なんて……。

そんな、ちくちくする好奇心を、私は先生に抱いています。

執務室に戻ると、先生から「大丈夫？」と心配されてしまいました。いささか長居してしまったかもしれません。あれだけ頭の中が温まってしまったので、先生のお顔を直視するのに抵抗があります。

とにかく、ラップトップを取り出して、課題に集中、です。

だけど……隣のデスクで紙がかさりと擦れる音に、先生がペンを走らせる音に、キィ、と微かに椅子がきしむ音に——私の耳は勝手に反応してしまいます。

先生と目が合っても、慌てて逸らしてしまいます。でもそうやって見ないようにしていても、首がすぐに傾いて、先生を盗み見てしまいます。

「今日は、何の課題をやっているの？」

「へっ？ は、はいっ、自然科学のレポート作成です。紙面に展開する説明や解説ですから、こういうのは朝飯前ですよっ！」

ですが、ふと目を落とすと、レポートの文章は途中から誤変換だらけになっていました。それどころか、全く関係ない文脈の中に「先生」の文字列が混じっている始末です。

「何だかシーンと静かだと落ち着かないし、こういう時はコトリの説明が聞きたい

な。課題をやりながらも話せる？」

「ええ、もちろんです。では本日は、自然科学の一分野である化学について説明しましょう。化学の始まりは人類が火を扱い始めた頃から始まっているとも言われており、卑金属から主に金のような貴金属を創り出そうと編み出された錬金術が、その発展に大きく関わってきました——」

私の話を最後まで聞いてくれる人は極めて少ないです。途中で逃げ出してしまいか、上の空になってしまうか。先生はそれを御存知なんです。だから、私に話す機会を与えてくれるのです。話させてあげた方が、私が喜ぶと知っているから。

ああ、やっぱ先生は、先生です。生徒のことをよく理解してくれています。

でもそれはやっぱり、大人から子どもへの気遣いであって、決して、私個人に興味があるわけでは……ないのでしょうかね。

私の話し声ばかりが響く執務室で、やがて先生の退勤時刻が近づいてきました。私がお仕事を手伝うのもここまでです。荷物をまとめてお辞儀をして、もう少しここにいたい気持ちを抱の中にしまいこみます。

「そういえば、コトリ……眼鏡を新しくしたんだね」

「……えっ……!?」

「銀縁眼鏡も、よく似合ってるよ」

「はえっ、は、はいっ！ あ、あ、ありがとうございます？」

脊髓に液体窒素でも流し込まれたみたいに、全身が急速冷凍されていきます。

——眼鏡型カメラ、つけっぱなしだった……！

——もしかして、あの二人に全部見られて……！

「お、おっ、お先に失礼しますっ！」

私は執務室から転げるように飛び出しました。すぐにウタハ先輩に電話をかけようとする、それを見計らったかのように、ヒビキから電話がかかってきました。

エンジニア部の部屋に戻ると、私の眼鏡はケースにしまわれていました。眼鏡型カメラが元々しまわれていたケースに。

「ごめんねコトリ。すぐにでも連絡して、電源のオンオフを教えておけばよかったのだけど。モニターを観察する方に、二人とも集中してしまっただけ」

「私も先輩も、好奇心には勝てなかった……」

ウタハ先輩とヒビキは、顔を赤らめていました。

何が起こったのかは、どことなく気まずそうな表情が物語っています。

「もしかして……全部……」

「うん。コトリの見たものは、全てモニターに映っていたよ」

「ほぎやーーーーっ！」

恥ずかしさのあまり、私は思わず机に頭を打ち付けてしまいました。

痛いです。涙が出てしまいそうなほどに。

どこまで見たのか、何を見たのか。尋ねるまでもありません。

私が先生をちらちら見ていたことも、トイレに籠って「ガス抜き」をしていたことも。上の空で誤変換だらけだったレポートの文面も。きっと、私が先生と話して

いた内容だって筒抜けになっていたはずですよ。

「先生と二人きりの時、声のトーンがちよつと高くなるんだね、コトリは」

「ひいっ！ い、言わないでくださいっ！」

「先生の首とか腕とかに何度もフオーカスしてたね。鎖骨のラインを舐めるように見てて、こ、こっちが、ドキドキしちゃった」

「はわわ、わわ……！」

ああ、今すぐ消えてしまいたいんです。

もしくは、二人の記憶を消してしまいたいんです。

ミニガンを全弾叩き込めば、どうにかなったりしないでしょうか……。

「……でも、まあ」

「思った通りだったよね」

私の赤裸々な内心を覗き見た二人は、どうしても口元が緩んでしまうみたいでした。いつも凜としたウタハ先輩でさえ、照れ笑いが混じっています。

「わ……分かってたんですか？」

「うん。当番の日が近づくと、コトリはいつもウキウキしてたから」

ヒビキは、私の感情を見逃しませんでした。

「コトリは、先生が好き？」

「……はい……」

私は、ヒビキの問いかけを肯定しました。もはや隠す意味もありません。

手を触れるのが怖くて曖昧にしていた甘い疼きに、輪郭が形作られていきます。

宗教、とりわけ「神」の始まりは、人の理解が及ばない、曖昧で不明な現象の擬人化であった。そう学んだのを思い出しました。名前を付けて認識を形作ることで、人はあらゆることに理由付けをして、心の安寧を得てきたのです。

私の感情にも、そんな風に、名前がついていきます。

恋です。

恋——。

目を背けていた暗渠あんきよがキラキラした小川になっていきます。

とくん、とくん。胸が高鳴ります。

先生が好き。

豊見コトリは、シャーレの先生を特別な人だと思っています。

しかしながら、その甘ったるい呪いを認めるのは、勝ち目のない戦いに臨むように、心細くて不安なことでした。怖気づく私をよそに、ウタハ先輩は口元を吊り上げています。

「よし、それじゃあ、作戦会議を始めよう」

「さ、作戦会議？」

「そうだ。『先生陥落作戦』とでも言おうか。先生を落とすんだよ」

「お、落とすって」

「説明した方がいい？ 先生をコトリに惚れさせて、先生と生徒の間にそびえる禁断の壁を壊して、一組の男女にしてみようってことさ」

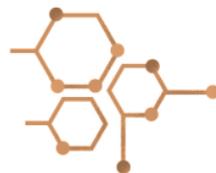
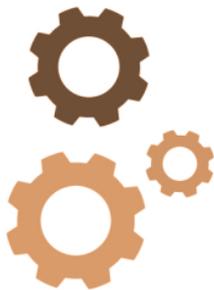
「ひえっ……やっぱりそういう意味ですよね……」

「そうだよ。コトリだって、ヒビキに色々吹き込んで、けしかけてきただろう？」

ソファアで隣あつて座る二人。袖口や作業用グローブで隠れていることも多い右手には、お揃いのリングが光っています。「うまくいけば、こうなるよ」と私をいざなうように、ウタハ先輩はヒビキの右手をそつと握りました。「コトリが見てるの」と小声で言いながらも、ヒビキは尻尾を振っています。



夜の書齋



エンジニア部の新発明「眼鏡型カメラ」のモニターを引き受けたら、私の赤裸々な内心が思わぬ形でウタハ先輩とヒビキに知られてしまいました。

目を背けていたモヤモヤには恋という名前が与えられ、「先生陥落作戦」に二人はやる気満々です。

これはもう、逃げられそうにありません。ですが「歩く足には棒当たる」という諺もありますし、ここは覚悟を決めて行動を起こしてみるべきでしょうか... .. ?



夜の書齋

